

募 梧陵さんへの手紙 集



浜口梧陵さんは、1820年に紀州広村(今の和歌山県広川町)で生まれました。今年で200年になります。梧陵さんは、広村などのためにいろいろなことをしてくれました。だから、広川町は梧陵さんに感謝するために、また梧陵さんがされたことをお手本とするように、みなさんにお伝えしたいと思っています。みなさんは、今もし梧陵さんにお会い出来たらどうということをお話ししますか。何を聞いてみたいですか。残念ながら、実際にはお会いできませんね。お話しする代わりに手紙を書いてみてください。手紙でお話ししてみましよう。「稲むらの火の館」が、梧陵さんに代わってあなたの手紙を受け取ります。実際の梧陵さんから返事はきませんが、みなさんからの楽しい話やおもしろい質問など、じょうずにかけている手紙を表彰させていただきます。長い時代を越えて手紙で、梧陵さんと話してください。

梧陵さんへの手紙募集

- ◎ 主 催 稲むらの火の館
- ◎ 応募手紙 400字以内(原稿用紙1枚に題名と手紙文だけで、名前は別用紙へ)
- ◎ 応募分野 小学生・中学生・一般(高校生以上)の分野で表彰します
- ◎ 表 彰 各分野共 第1席 広川町長賞
第2席 広川町教育委員会賞
第3席 稲むらの火の館賞
入 選 若干数(入賞は応募点数で変わることがあります)
- ◎ 入賞作品展示 入賞作品等は「稲むらの火の館」で展示いたします
- ◎ 応募締切 令和2年9月10日
- ◎ 送り先 643-0071 和歌山県有田郡広川町広671
稲むらの火の館 「梧陵さんへの手紙」係
(応募作品はお返しいたしませんので、ご了承ください)

<お問い合わせ>

稲むらの火の館 TEL 0737-64-1760 FAX 0737-64-1761

E-mail: inamuranohi@view.ocn.ne.jp

《浜口梧陵さんってどんな人》



みなさん「浜口梧陵さん」ってどんな人か知っていますか。昔、教科書にのっていた「稲むらの火」という物語では主人公は「浜口五兵衛」という名前が出ていました。梧陵さんは、本当は「儀兵衛」でしたが、「稲むらの火」の原作の小泉八雲の「生ける神」に「浜口五兵衛」となっているからです。そして「稲むらの火」の話は、地震の後、津波がくることに気づいた「五兵衛」さんが、そのことに気づいていない村の人たちに知らせるために、家の横に積んでいた「稲むら」に火をつけて知らせた。その火を、火事と思った村人たちがそれを消すために高台へかけつけたので、津波から助かった。となっていますので、「稲むらの火」の話は、津波が来る前に早く避難したから助かった、ということです。また、「梧陵さん」は、津波の後大きな被害を受けた広村を元通りにするために、自分のお金を出したが、その代表は「広村堤防」という大きな堤防をつくって、次の津波に備えたことです



「浜口梧陵さん」は「耐久社」（広村稽古場）という学校をつくって、若者に勉強をする場もつくりました。その学校は、今も耐久高校や耐久中学校へとつづいています。また、明治の時代には和歌山県で英語学校をつくる計画もたてました。

「梧陵さん」は医学の発達のためにもたいへんな貢献をしています。蘭学医(オランダの医学を勉強したお医者さん)を応援しました。こうしたお医者さんたちがお金を出して「種痘所」という病院をつくりましたが、完成して1年もたたないうちに火事で焼けてしまいました再建するために、たくさんのお金を寄付しました。この病院は今の東京大学医学部になっています。

日本の国が、さむらい中心の江戸時代から明治になった時、梧陵さんは今の言葉で言う最初の「郵政大臣」に任命されたり、和歌山県の最初の県議会議長に選ばれたりもしました。

「梧陵さん」は若い頃から、日本の国を近代化するために、アメリカやヨーロッパを参考にしなければと言っていたのです。明治の時代になってアメリカへ行きました。残念なことに、アメリカ旅行中に、病気になりニューヨークで亡くなりました。

.....
手紙の原稿用紙には、この用紙に記入して一緒に送ってください(多数の場合コピーをお願いします)

手紙の題名	
氏名(なまえ)	
住 所	
所属(学校名等)	